

局所進行期子宮頸癌に対する温熱化学放射線療法における 温度パラメーターと治療成績の関連：多施設無作為比較試験登録例での検討

大栗隆行、播磨洋子、今田肇、櫻井英幸
大野達也、田中正博、寺嶋廣美

昨年の本学会において局所進行子宮頸癌に対する化学放射線療法(CRT)と温熱化学放射線療法(CRT+HT)の両者を比較する多施設無作為比較試験(RCT)の結果報告が行われ、CRT+HT群におけるCR率の有意な改善が示された。本研究の目的は同RCTにおける温熱療法施行例の温度パラメーター解析を行い、治療効果と温度因子の関連を評価することである。RCTのCRT+HT群に登録された51例のうち加温データの詳細な解析が可能であった47例を対象とした。病期は、IIb期11例、IIIb期32例、IVa期4例であった。放射線治療は外部照射と腔内照射、化学療法はCDDP 40mg/m²を週1回、総3~5回、温熱療法は総3~5回のプロトコールで行われた。温熱療法は8MHz誘電型加温装置で施行され、腫瘍内温度を推定するための直腸腔内温度測定を毎回施行された。温熱療法の温度パラメーターと治療効果の関連を解析した。温度パラメーターCEM43°C T90の中央値は1.1min.(0.1~46.6)であった。T90の中央値は、38.9°C(37.7~42.2)であった。温度パラメーターのCEM43°C T90高値群(≥1 min)26例の局所制御率は、低値群(<1 min)21例と比較し有意に良好であった(p=0.0247)。5年局所制御率はCEM43°C T90高値群で92%、低値群で66%であった。CR率はCEM43°C T90高値群では96%(25/26例)であったが、低値群では64%(16/21例)にとどまった(p=0.0758)。5年無病生存率は、CEM43°C T90高値群で81%、低値群で60%であり、高値群で良好な傾向にあった(p=0.0683)。5年全生存率は、CEM43°C T90高値群で80%、低値群64%であったが有意差を認めなかった(p=0.3368)。CDDP投与総量(200mg/m²)は、局所制御率、CR率および無病生存率において有意因子ではなかった。局所進行子宮頸癌に対する温熱併用CRTにおいて、高い温度パラメーターでの温熱療法の施行により局所制御率の改善が得られる。